

2019年8月31日(土)

老球の細道498号

8月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

近年毎年やってくる「運動禁止」の猛暑は8月になって本格化した。「バスケットボール選手は脳の熱中症になれ！」などと豪語してクリニック指導をしていた私は、あまりにも張り切りすぎて軽い熱中症に数回なってしまった。私の時代は終わったのか。

「無常迅速」、この言葉が頻繁に頭を駆け巡った月だった。知人や親せきが、皆若くして逝去、脳梗塞を起こしてしまった。家族の無念、悲しさ、寂しさを思うと、何気ない日常の大切さを改めて思い知らされた。

退職してから「地域デビュー」を果たした私は、孫の散歩で出会う隣近所の人たちに挨拶をするようになった。それを見ていた孫は見知らぬ人にも声をかける。しかし、自分から声をかけるが、相手からの声かけには反応が鈍い。「お名前は?」「・・・!」、「いくつ?」「・・・!」。幼児なのに、すでに個人情報守秘意識が身についていた。

1・テレビから

◆「負け犬が成功する映画に見えるけれど、本当にうったえたかったのは勝つことが全てではなくて逆境にあっても屈せずに自分のアイデンティティを持つこと」〈シルベスター・スタローン・NHKBS「アナザーストーリー」〉

今までの試合を振り返ると負けた試合の方が圧倒的に多かった。それでも卑屈にならず、いつかは夢がかなうと希望をもってこられたのは、「ロッキー」のような多くの映画に感化されてきたからである。「ロッキーのテーマ曲♪」を練習のW-upにも使っていた。

◆「“今日、広島、長崎の最後の被爆者が死にました” 21世紀のいつの日か、こういう記事が新聞の隅に載ることでしょう。見出しが大きくても、小さくても、その日が平和であるのを願うのみです」〈林京子・NHK ETV・少女たちが見つめた長崎〉

今年も終戦記念日がやってきた。私が生まれてからまだ一度も戦争がない。歴史が風化しないよう毎年語りついでいかなければならない。「過去を反省することは後ろ向き行為ではない。未来にむけての責任である」。

2・新聞、雑誌のコラム等から

◆「人生はのろさにあれ のろろと蝸牛(ででむし)のようであれ〈朝日・折々のことば・山村暮鳥〉

同じような意味のことばに「たゆまざる 歩みおそろし かたつむり」がある。長崎の平和祈念像を作成した彫刻家のことば。不遇の時代にあっても歩みをやめてはいけない。

◆「人がセミと違うのは、何度でも殻を破れることだ」〈朝日・天声人語〉

田臥選手の著書に『Never to late (今からでも遅くはない)』がある。何歳になっても、何時でも変わる気になったら変われる。教訓はどこにでもある。

◆「指導するうえで言葉はとても大切だ。自分の発言は必ず選手に影響を与える。好影響か悪影響のどちらかで中間は存在しない。一言もおろそかにできない」〈朝日・ラグビーイングランド代表監督・エディー・ジョーンズ〉

名将は例外なく話がうまい。体が動かなくなったらコーチングの肝は「言葉」である。伝える際には心を込めて感情移入が大切。名将はまた例外なく読書家で語彙が豊富。